



ささへるニュース

Vol.13

2016年 秋

だれもが輝く明日へ



Sasakawa Memorial
Health Foundation
笹川記念保健協力財団



訪問先で看護アセスメントを行う
起業家育成事業の修了生

特集 看護師が社会を変える！

地域 みんなが社会のデザイナー／看護小規模多機能型居宅介護と在宅訪問看護センター
看護師が社会を変えています！／全国に広がる日本財団在宅看護センター

島の命を守る救急船／8月の福島 ―学生が見て感じたもの―

2017年度ホスピス緩和ケア事業助成者募集／マンスリーサポーター募集

看護師が社会を変える！

地域 みんなが社会のデザイナー

ソーシャルデザインリガレッセ日本財団在宅看護センター豊岡代表 大槻恭子

少子高齢過疎化が進む私の暮らす豊岡。看護師として目の前のケアに追われるだけの毎日でもいいのだろうか？もっとできることがあるのではと感じていた時、「日本財団在宅看護センター」起業家看護師育成事業の「看護師が社会を変える」の一言を見て胸が高鳴りました。ケア、教育、コミュニティをキーワードとする本質的看護実践の答えがここにあるはず！と受講を決めました。8カ月間、期待通りの学びを得て、2015年8月、兵庫県北部の但馬地域に位置する人口約8万5千人の豊岡市に、リハビリ対応型訪問看護ステーション「ソーシャルデザインリガレッセ」を開業しました。

多職種連携・地域連携のカタチ

看護は手段であって目的ではないと思っています。ただ一般的に、看護師は自ら職域の壁を作りやすく、ヘルパーさんは、リハビリさんはこうだと指摘はしますが学びあう姿勢に欠ける人もいます。本来はその人が地域でより良く生活できることを共通の目的とし、ケアがうまくいったときには喜びを、看取った時には哀しみを、関わるすべての人と分かち合えるはずなのです。そして私は本当の意味での継続的な在宅ケアは、多職種の連携だけでなく、地域とつながりをもってはじめて達成できると思っています。ここでは自然農法農業の起業家、Jターンした音楽

好きの若者、ご近所さんなど、利用者さんが地域の方々とさまざまな形でつながり、素敵な絆がうまれてきています。私は稽古塾塾という豊岡市の取り組みにも参加し、異業種の仲間と知り合うことができ、今もたくさんのかたをその繋がりから学んでいます。地域の人々をつなげて社会をデザインする。そのためには看護師自身が、地域の人々と繋がっていく必要があります。

力をいただいたケア

近所で迷惑行為を繰り返していた統合失調症の方がおられました。1日100回以上119番に電話し、薬局で買った咳薬と便秘薬を交互に多用、食事は毎日レトルト、むくみと肥満で大変な状態でした。保健



第1期修了生大槻恭子氏

師さんと相談し初回は顔合わせで入らせてもらい、とにかく丁寧な看護アセスメントを心がけ、ゆっくりと信頼関係を作っていました。市の社会福祉協議会、相談員、保健師、苦難の声をあげていた周囲の方々と公民館で集まり、1年近く話し合いを重ね、病気の特徴などについ





て理解を深めていただきました。地域が変わり始めるとその方自身が少しずつ変わっていきました。今では10キロ以上減量し、おしゃれや料理、庭のガーデニングを楽しんでおられます。これまで関係が悪かったご近所さんも「ここに野菜植えてみたらどうや」と声をかけられるようになりました。

この地域も他と変わらず在宅精神療養者への支援はまだまだ手薄ですが、保健所長さんのイニシアチブで施設からの在宅移行が積極的に行われています。リガレッセはその受け入れ機関として手をあげています。継続的な精神ケアにも地域社会とのつながり、理解、サポートが欠かせないと感じます。困難事例については医療専用のSNSで、関係者と情報共有し、また他県の医療者からはアドバイスをいただいております。地方では特にICTが役立っていると感じます。

在宅でお看取りできた、独居で末期胃がんの60代男性がおられました。「家にいたい」という彼の静か

な願いを叶えるため、対話を続け、意思決定支援をしながら最期までみんなで支えたケースです。「みんな」というのは近所の人やお友達も含み、彼らが自発的に当番表を作りトイレ介助を申し出てくれ、代わる代わるサポートしました。主治医と細やかな連携をとり、私たちは本人、周囲が不安にならないよう病状やケアの必要性を常に丁寧に説明し、どうしたら楽になるかを本人とも一緒に考えました。最期、吐き気や息苦しさが出てきたときには、いくつかの選択肢の中、点滴中止を本人が望まれました。すると腹水も減り呼吸も楽になりました。好きなマンガを手にとり、手作りのコーヒーをご近所さんにいってもらい、毎日を楽しみながら最期の日々を迎えることができました。彼を最期まで看取った地域の方が『私も家で最期を迎えたいと思いました。』と笑顔で言われ、彼が自身の最期を通して教えてくれた数々のことはこれからの地域社会を支える大きな力になると感じました。

地域のミライ、 看護ができるコト

喜多理事長の言われる「地域の健康を護る」とはこういうことかな、と地域を走ることで見え始めてきています。人々がここに暮らす、そこに看護がある。その形は必ず人々の日々の暮らしを向上させ、より良いものへと創りあげていくことができると感じています。看護師として地域で活動していくことは、予防から人生の最期まで関わり地域を新たにデザインしていくことでもあります。そしてそれは看護職だけでなく、地域に暮らすすべての人々と共にソーシャル・デザイナーとして但馬にある資源で生き抜いていく、そんな強さのある地域であるためにも…。「繋がる・紡ぐ・存在」。リガレッセが但馬に、そして但馬から伝えていけること、看護の役割と可能性を継続的にあきらめず発信していきたいです。



看護小規模多機能型居宅介護と在宅訪問看護センター

在宅看護センターと看護小規模多機能型居宅介護事業所^{*}を運営している日本財団在宅看護センター起業家育成事業1期生の沼崎美津子氏（一般財団法人在宅看護センター結の学校）より寄稿いただきました。

^{*}看護小規模多機能型居宅介護（看多機）：利用者のニーズに応じて、施設への「通い」を中心として、短期間の「宿泊」や利用者の自宅への「訪問（介護）」や、看護師による「訪問（看護）」を組み合わせた医療を含む一体的なサービスのこと。

病院勤務時、医療依存度が高い高齢患者の多くが在宅療養に対する不安が大きいと実感していました。その後、訪問看護と介護支援専門員にも就き、人を丸ごと見るべき看護の本来の姿を考え始めました。東日本大震災の際、避難患者の在宅移行に関わり、「日本財団在宅看護センター起業家育成事業」を知りました。8カ月の研修で得た管理運営・地域・行政との関わりなど多様な知識が、私が経営者に生まれ変わる決意と勇気を与えてくれました。一般

財団法人に所属しながら、起業構想が承認され、開業までこぎ着けられたのは、たくさんの方々のご理解とご支援によります。「訪問看護」と「看多機」の同時運営は大変ですが、やりがいもあります。同じ目標に向かって邁進するスタッフと共に、医療依存度の高い在宅患者の支援を中心に、超高齢化多死社会を見据え、自然死看取りや小児・障がい者ケアも視野に入れ、壮大なネットワーク化が進む「日本財団在宅看護センター」の一角として貢献したいです。



沼崎美津子氏



入所者のケアをする様子

看護師が社会を変えています！

理事長 喜多悦子

地域の健康を守る看護職

2025年、わが国は人口の1/3の65歳以上という超高齢社会に達します。望まなくとも体力は低下し、何らかの病気と共存せねばならない人々が増えます。施設でなく在宅で…願う人々には、病気を治すcureと生活支援を含むcareが必要です。そのような人々が住む地域の健康を丸ごと看まわる最適の職種が看護師です。科学的なフィジカルアセスメントを武器に、個々の人々に適正

な健康の維持増進を指導しつつ、他職種と協働して全人的ケアを提供するのが日本財団在宅看護センター!! 日本の伝統でもあるきめ細やかな手技と新しい知識と技術に裏打ちされた看護、管理経営と地域連携の在り方を修得し責任者が地域をまもります。日本財団の協力で始めた「看護師が社会を変える」事業は4年目を迎えます。初めはためらいながら、研修中に徐々に情熱が燃え上がり、8ヵ月後には、「行政社会力」「事業運営力」「看護実践力」

「地域・保健連携力」を修得したプロ在宅看護センター管理者に激変します。開業1年余で、月800件の訪問をこなす猛者センターも出現しています。研修では、行政・財務・労務・法務、看護に医療と多様な分野の第一線実践者、研究者の講義、ここでしか学べない格調高い学問体系に触れます。知識の習得だけではなく、責任感と覚悟を強化した組織の管理者看護師として、地域を変え始めた仲間が20人。あなたも、あなたの地域を変えて下さい。

2017年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業 第4期生募集

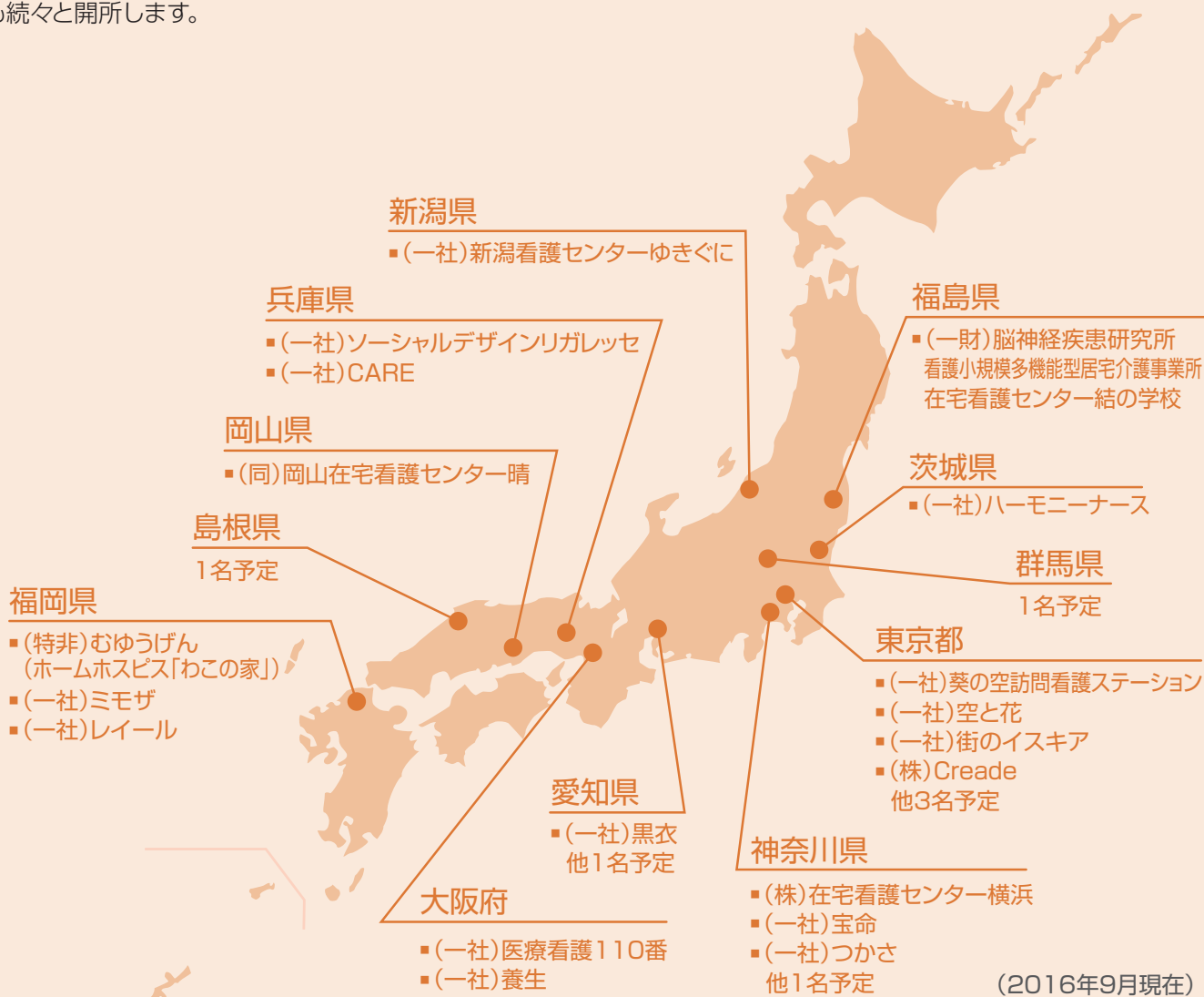
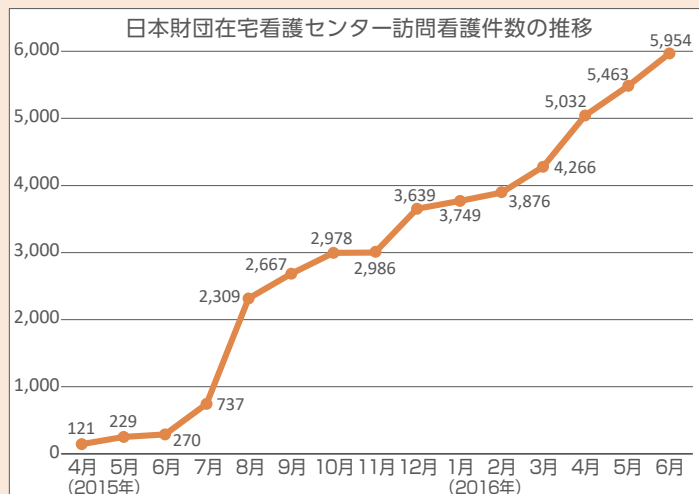


全国に広がる日本財団在宅看護センター

本研修の修了生による在宅看護センターは、全国19カ所で開業しました。

それに伴い、センターの訪問件数の総数は順調に伸び続け、右表のような成果をあげています。今後も質の担保に努めながら、さらなる活躍が期待されます。

すでに開業したセンターの中には、訪問看護に加え、ホームホスピスや看護小規模多機能型居宅介護の機能を併せ持つものもあります。地域のニーズに対応した「日本財団在宅看護センター」は、今後も続々と開所します。



※ぜひお気軽にお問い合わせください。

TEL: 03-6229-5390

E-mail: smhf_home-nursing-cc@tnfb.jp

※詳しくはホームページから

<http://www.smhf.or.jp/hospice/zaitaku/>



島の命を守る救急船

世界第2の島数を有するフィリピンでは、経済的・地理的な理由で、命に関わる病気やけがをしても、病院に行けない人たちがいます。パラワン州北部で、島に住んでいても、障がいがあっても、貧しくても、天気が悪くても、緊急時に必要な医療にアクセスするための取り組みを支援しました。

病院に行けないのはなぜ？

かつて世界最大のハンセン病隔離施設であったクリオン療養所ならびに総合病院は、現在ではパラワン州北部を管轄する地域中核病院です。その管轄地域で暮らす約25万5千人の健康を守る上で課題となっているのが、貧困と医療施設へのアクセスです。

同地域で暮らす約3割は貧困層です。病院までの交通費や治療費が払えない、仕事を休めば家族の暮らしが成り立たないなど、さまざまな理由から、なかなか病院に行くことはできません。明らかに重篤な状態になって初めて病院に行きますが、すでに手遅れのことも少なくありません。

もう1つの課題は、医療施設へのアクセスです。病院管轄地域には中小の島が点在していて、病院のあるクリオン島までモーター付きの船でも6時間以上かかるところもあります。天候が悪く海が荒れると、船は出せませんし、サンゴ礁の浅瀬が多い同地域は、夜間の船やボートの航行はできません。一刻を争う緊急時に、適切な医療を提供できる病院まで患者を搬送することができず、救える命が失われてきました。どうしたらパラワン州北部の人たちの命を守ることができるのか。出された結論が救急船でした。たとえ



島の人々の命を守る救急船

夜でも、天候が悪くても、モーター付きの船を借りるお金がなくても、必要であれば誰もが病院にアクセスを確保するための救急船。

フィリピンには、これまで急病人やけが人を搬送するスピードボートはありましたが、搬送中に医療行為を行える救急船はありませんでした。度重なる協議の末、船内で必要な救命行為が行える救急船の供与が合意されました。造船は2014年末に始まり、2016年7月にクリオンに届けられました。

パラワン州北部に届いた 日比友好の救急船

今回の救急船を可能としたのは、日本のボートレースチャリティ基金です。2002年に作られた同基金は、モーターボート選手からのご寄付や、選手の私物をオークションにか

けた入札金をもとに、これまでフィリピンの他、世界各国のハンセン病対策に役立てられています。

2016年8月、救急船が配備されるクリオン総合病院で、進水式が行われました。式典には、ボートレースチャリティ基金の委員である日本モーターボート選手会、日本レジャーチャンネル、日本財団、笹川記念保健協力財団の他、ミマロパ地域保健局長、救急船がカバーする4市の市長や市議員、クリオン総合病院職員、ハンセン病回復者など多数が集まりました。多くのメディアも駆けつけ、テレビ、新聞でも大々的に報じられました。

日比友好の救急船が、パラワン州北部の健康を守ることを、そして救急船の使用がフィリピンの他地域でも広がっていくことを期待します。

8月の福島 ―学生が見て感じたもの―

8月22～27日の6日間、医学、薬学、看護学の医療系学部の学生対象の放射線災害医療セミナーを福島県立医科大学、長崎大学と共催で実施しました。今回は、東北から九州まで全国16名参加。前半2日間は福島市内で講義と演習、3日目以降は川内村に滞在し、福島第2原発、田村市の甲状腺検診、環境省ご協力による富岡町除染作業・川内村仮置き場見学、長崎大学川内村復興推進拠点によるフィールド実習、夏休み子ども教室での交流、健康フェスタでの住民交流を実施。震災で何が起こり、5年経過した今、そこで暮らす人々がどのような状況、思いでいるかを新たな目で見、考え感じる機会となりました。



川内村での修了式の様子

第3回「放射線災害医療サマーセミナー」を終えて

2011年3月11日、東日本大震災による大きな被害を受けた福島でスタートした本セミナーは3回目を迎えました。今年も福島県立医科大学、長崎大学の諸先生方の指導・引率をいただき無事、終わりました。今年参加の学生は、初日より自主的に毎晩全員が集合し、自身の専門分野の知識、あるいは経験を交えて放射線や自然災害における見地を交換し合い、時には活発な討議にも発展していたようです。

大学・大学院では受け身的な講義が多い中、本セミナーでは講義での質疑応答、炎天下のフィールド実習で指導教官、現地関係者への質問など、積極的なアプローチには目

を見張るものがありました。自分の目で「今の福島」、「本当の福島の状況」を少しの漏れもなくキャッチしたい!、という心の表れのように映りました。

川内村では、これまで同様、村長、保健師の講義、帰村している小学生との交流、健康フェスタで三遊亭好太郎師匠の落語にあわせた住民との交流と盛り沢山のプログラムでしたが、朝から晩まで笑い声が絶えない晩夏の数日間でした。帰り際、受講生は口々に、「地元に戻ってセ

ミナーで得たことを周囲の人に伝えたい」、「学部の違う学生と同じテーマについて意見交換できたのはとても勉強になった」、「参加して良かったで終わってはいけない」、「学んだことを今後に生かしたい」と固い決意を伝えてくれました。彼ら自身の五感で感じ得たものを、福島と福島の復興を支え続けている人びとのために、伝えてくれることを期待しています。

ご支援、ご協力いただいた皆さまに感謝!



川内村仮置き場見学



健康フェスタでの住民との交流

2017年度

ホスピス緩和ケア助成事業 応募受付中

誰もが全人的なケアを受けられる社会と、あらゆる病に向き合うすべての人にQOL（生活の質）の向上を目指し、ホスピス緩和ケア体制及び質の向上のための先駆的な取り組みへの支援、また在宅看護・地域医療の普及のための人材育成を行います。

	助 成 金 額	助 成 期 間
研究助成事業	上限150万円	2017年4月1日～2018年2月9日
地域啓発活動助成事業	上限30万円	
人材育成事業		
・ホスピス緩和ケアドクター研修助成	上限700万円	2017年4月1日～2018年3月31日
・奨学金支援	国内 上限100万円 海外 上限200万円	
・ホスピス緩和ケア従事者に対する海外研修助成	研修期間3カ月（以上） 研修期間1カ月間	2017年4月1日～2018年2月9日
	上限120万円 上限50万円	

詳細・応募 財団ホームページ <https://system.smhf.or.jp/app/jp/> より

応募締切 2016年10月21日（金）ホスピス緩和ケアドクター研修は10月31日（月）まで

マンスリーサポーターを募集しています

笹川記念保健協力財団では、さまざまな事業を安定して継続していくために、マンスリーサポーターを募集しています。みなさまのご支援をお願いいたします。クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただくことができます。

ご寄付いただく活動分野と口数をそれぞれお選びいただけます。

ハンセン病のない世界

ホスピス緩和ケア

公衆衛生の向上

クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただけます

一口1,000円／月をお好きな口数で

*寄付金額の変更、停止はいつでも自由にできます。当財団への寄付金は、税制上の優遇措置の対象となります。

詳しくは当財団の[ホームページ](#)→[ご支援ください](#)→[マンスリーサポーター](#)（<http://www.smhf.or.jp/>）をご覧ください。

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/理事長ブログ/財団ブログ（ハンセン病対策事業/ホスピス緩和ケア事業/公衆衛生向上のための事業）
URL：<http://www.smhf.or.jp/> facebook：<https://www.facebook.com/smhf.tokyo>
- ニュースレター「チームささへるニュース」：年4回発行

チームささへるニュース Vol.13 2016年秋発行
発行元：公益財団法人 笹川記念保健協力財団
発行人：喜多 悦子
編集：チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局（笹川記念保健協力財団内）
〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
電話：03-6229-5377（代表）FAX：03-6229-5388
EMAIL：smhf@tnfb.jp URL：<http://www.smhf.or.jp/>

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION